

元女子プロ野球選手

近藤信子さん

昨年の秋、「プリティ・リーグ」という映画がヒットしました。米国に女子プロ野球があった！実は終戦直後の日本にもそれは存在していたのです。

こんどうのぶこ
●近藤信子さん

昭和9年9月1日生まれ。27年3月、女子プロ野球入団テストに合格。鹿児島実践女子高等学校を中退して、三共製菓の「三共レッドソックス」に入団。その後、いくつかのノンプロチームで活躍し、41年に引退。女子野球はチーム数が次第に減り、46年に消滅した。引退後は仕事のかたわら、アマチュアチームのコーチを務める。52年、クラブチーム「東京スターズ」を結成し、監督兼投手。63年、関東女子軟式野球連盟が結成され、副理事長に就任。イベント企画会社社員。独身。



昨年十一月、東京・神宮外苑で「第五回女子軟式野球秋季関東大会」が行われました。カラフルなユニフォームが躍るなか、ひととき強さが目立っていたのが「東京スターズ」。淡いグレーのストライプのユニフォームに真っ赤な帽子、アンダーシャツ、ストッキング。このチームの監督を務めるのが、女子プロ野球選手だった近藤信子さんです。

“女長嶋”と呼ばれた現役時代

球場に取材に伺った日は、一回戦の対「大和なでしこ」戦が行われていました。近藤さんは最終回にピッチャーとして登板。相手チームのバッターを三者凡退に仕留め、24―4というスコアで大勝しました。

「ナイスピッチングでしたね。」

「球速は十分遅くなりました。むかしは時速百キロくらいで、いまは七十キロくらい。でも、まだコントロールがありますからね。」

「東京スターズは全部で何人ですか。」

「十八人です。主婦が多くて、平均年齢は四十八歳。中には十九歳のお嬢さんとの母娘もいます。」

「平均年齢がずいぶん高いですね。」
「平均五十一歳というチームもありますよ。もともとそれ以外のチームは、ほとんど平均二十代ですけどね。うちの選手はみんな、結婚しても野球を続けさせてくれる旦那さんを選んでいくということでしょうね。」

「野球を始められたきっかけは。」

「何より、好きだったということですね。それと、私は運動神経がよかったです。それで、家の近くに軟式野球の監督が住んでいたんですよ。その人がいつも私の帰りを待ち構えていて、キャッチボールをやらされたんです。」
「女子プロ野球に入りたいききさつは。」

「高一の終わりに、鹿児島県で入団テストがあったんです。周りの人たちに勧められて受けて、合格しました。」
「どんなテストだったんですか。」

「キャッチボールにトスバッティング、あと遠投にベースランニングだったかな。十七、八人受けて、受かったのは三人でした。」

「当時（昭和二十七年）、女性が野球をやるということに対して、周囲の目はどうでしたか。」

「当然、よくは思われませんでしたよ。野球なんて女の子のするものではないと。でも結局、父がプロ入りへの承諾書を書いてくれました。合格した三人のうち、親が承諾書を書いてくれてプロに入れたのは私一人でした。」
「指導者はどんな方でしたか。」

「桑沢源吉さんという方で、お父さ、んみたいなき感じでした。押しつけながら一歩退く指導」をなさる方でしたね。いま私が怒ることなくチームを引っ張ってゆけるのは、桑沢さんのお陰だと思っています。」

「プロ選手としてはどのくらい活動されたのですか。」

「私が入団した翌年から、女子プロ野球がノンプロに移行してしまっただけで、プロとしては一シーズンだけです。通算では十四年ほどプレーしました。ポジションはショート。プレーが派手だったのか、“女長嶋”なんていわれたりしました。」

「ノンプロになった、ということはお、ふつうにお仕事もされたんですか。」

「ええ、ノンプロ時代は、社員というところで、午前中は仕事をしています。立場としては、会社の宣伝マンと

いったところですね。お得意さんともよく試合をして、年間では三百試合くらい。勝率は八割五分ぐらいでした」

「ちなみに、プロ入り時に契約金のようなものがあったんでしょ。それとお給料はどれくらいでしたか。それと契約金なんていうのはなかったですよ。お給料は月三千〜五千円くらい。当時の男性社員並みの金額でした」

▲現役時代の近藤さん（後列中央）昭和四十年ころ



いつの日か女子の社会人対抗を

米国に女子プロ野球があった（一九四三〜五四年にかけて存在）編集部

「いいえ、驚きました。当時、知っていたら、対戦してみたかった。いまの日本のプロ野球はメジャー・リーグになかなか勝てませんが、私たちが彼女たちと対戦していたら、二〜三割は勝てたと思いますよ」

映画「プリティ・リーグ」の影響

もあって、女子野球が注目され始めています。（この日も、近藤さんはテレビをはじめ、たくさん取材を受けていらっしやいました。）今後の普及に向けては、どのように考えていらっしやいますか。

「関東女子軟式野球連盟ができて五年になります。十年をメドにしているんですが、日本中にどのくらいチームができるかがカギだと思います。いいチームがもっとも増えるといいですね。そして私たちがそうだったように、企業が宣伝媒体として女子野球をうまく利用してほしい。ゆくゆくは女子の社会人対抗なんてやってみたいな」

「女性でもテストに受ければ、男性と同様にプロ野球選手になれるようになります。その可能性についてはどう思いますか。

「女性はまたプレートの一つひとつが粗いので、当分は難しいんじゃないかな」

「女子選手を指導していくうえで、男性指導者に考えてほしいことは、

「女性は男性が思っている以上にデリケートです。そこをうまくリードしてほしいですね。それと、女の子は想像以上に上達するのが速いんです。だから、コーチの人にもっと女子野球を勉強してほしいと思います」

「プレヤー兼監督としていつも選手にいつていらっしやることは、

「一つしかないボールから絶対に目を離すな」常に基礎を大切に」の二

女子野球の歴史

年月日	できごと
大正 11年	●和歌山県の高等女学校に野球部が誕生 〔京都、名古屋、仙台の高等女学校にもチームが存在していた。当時の雑誌で、「チームワークは協同一致の心 犠打は社会奉仕の精神方針」ともちあげられている。〕
15年	●文部省が「過激すぎる」と解散命令を出した
昭和 22年 8/29	●横浜ゲーリッグ球場 貿易再開記念女子野球大会開催
23年 7/20	●東京・銀座のダンスホール『メリーゴールド』が、非公式ながら初の女子プロ野球チームを結成
24年 5月	●『ロマンス・ブルーバード』の入団テストが行われ、約30人が合格 日本初の女子プロ野球チームができる
25年 1, 2月	●『レッドソックス』『ホーマー』『パールズ』の入団テスト
3/28	●4球団代表の協議により、日本女子野球連盟結成
4/10	●連盟結成記念大会 女子プロ野球初の公式戦（後楽園球場『ブルーバード』優勝）
7/23, 24	●大会後、続々と新チーム結成
8月	●後楽園球場で初の納涼興行（優勝『三共レッドソックス』） ●第1回東西対抗優勝戦（優勝『三共レッドソックス』） ●『ブルーバード』連盟を脱退 ●『大阪ダイヤモンド』『神戸タイガース』『名古屋レインボー』など11チームにより全日本女子野球連盟結成
9/28, 29	●同連盟結成記念大会
秋	●『ブルーバード』解散
26年 5月	●新宿に専用グラウンド完成
シーズン中	●『ホーマー』解散
7月	●初の紅白対抗オールスター戦（後楽園球場）
27年	●このシーズンを最後にプロの看板をおろしノンプロに方向転換
46年	●この年のシーズンを最後に、女子ノンプロ野球は消滅
63年	●関東女子軟式野球連盟結成

（近藤さん提供の資料をもとに編集部で作成）

つです。私たちのチームが若い人たちに勝てるのは、基本がちゃんとできてからですよ。あとは、『勝つても負けても恥ずかしくないプレーをしよ』と、いつもいっています」

「ユニフォーム姿の私がいちばん私らしい。野球は走れなくなるまで続けたい。近藤さんはまっすぐ前を見つめてごうおっしやいました。近藤さんにとって野球とは、「ライフワーク」などという言葉ではなくることではない、人生そのものなのかもしれない。（九二年十一月二十三日取材・聞き手 山本尚子）